

松染  
秋  
迺  
七  
草  
三



~ 13  
3393  
3



門 13  
3593  
巻 3

史秋七草卷之三

東都

曲亭馬琴

三時入庫

花外庵

第五

葛よ名つる

まろれ草

秋心まじり花はじりさの松や針。かた露さ玉とて。ならぬも。美しき

毛花が袖小吉野の葛ゆうら枯る衣平寒き神さ月よ名のまろ

り秋野姫と。乳母豊浦よ枝掖まろ。六田の旅宿をせし。まろ

入め依隠まよ。涙の雨ぞ降そ。胸のまろまろ。さうてゆ。道丁

るけまおひ入る山迹踏を彼此と。野をる死里をる千群。まろ

寺よ。遠くね。西安の里まろ。たどり。まろ。まろ。まろ。まろ

く。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ

る。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ。まろ

豊浦ハ

編

西安の川を渡りしに、いれど、あまふ、痛ましく見え、心を。行路を  
備ひし。姫君と共、其の舟を、轎と引し。後、  
の、日、秋、時、娘と、共、乗し、轎夫へ、白、皂、の、太、郎、犬、赤、斑、の、二、郎、  
犬と、呼ぶ。野、臥、の、悪、棍、る、が、件、の、主、従、が、形、容、い、と、ら、う、と、け、く、庸、  
常、る、旅、客、と、も、え、え、ざる、ふ、郎、黨、只、一、人、ど、も、俱、せ、ど、ら、南、朝、の、  
零、落、人、る、と、ど、や、と、思、ふ、よ、豊、浦、が、懐、の、重、さ、る、れ、由、ら、後、憎、く、

明、白、う、し、と、の、後、互、ら、う、計、較、て、四、表、八、表、の、物、り、う、ら、う、と、い、  
は、慰、め、與、じ、と、昇、り、く、走、り、ぬ、ら、う、ま、法、隆、寺、の、門、前、に、坐、す、  
住、る、賣、油、郎、丹、五、兵、衛、と、い、ふ、の、あ、り、り、年、の、齡、を、五、十、と、い、う、

あ、ま、子、を、な、く、て、世、よ、び、ぶ、る、男、ら、り、え、其、の、性、は、實、  
は、え、く、高、利、を、貪、む、と、油、と、篩、に、干、煉、し、て、針、又、汲、受、と、い、  
は、は、の、目、より、油、箒、へ、う、り、入、り、一、屋、由、違、ひ、を、引、着、  
て、る、れ、人、も、與、あ、る、と、い、ひ、く、油、緒、の、丹、五、兵、衛、と、禪、名、し、  
その、油、を、買、入、り、の、多、く、加、梅、法、隆、寺、の、法、師、を、と、も、い、と、不、便、多、  
し、の、ろ、う、と、い、く、堂、塔、佛、前、の、御、燈、を、と、り、丹、五、兵、衛、の、油、

な、り、用、ふ、れ、と、う、ら、う、は、か、う、し、輕、く、丹、五、兵、衛、ハ、十、年、餘、  
と、経、管、う、ら、う、有、一、夜、の、夢、よ、誰、と、い、ふ、枕、上、お、声、あ、り、  
と、高、ち、ふ、口、順、ぬ、覺、て、後、その、と、お、り、い、う、る、故、と、も  
曉、り、ぬ、ぬ、く、ら、後、又、辨、り、う、ら、う、と、も、あ、り、い、う、る、故、と、も  
の、月、由、ち、く、経、管、の、為、よ、二、桶、の、油、と、扛、擔、ひ、く、彼、此、と、糶、  
あ、り、く、冬、の、暑、を、こ、れ、う、速、く、夕、陽、斜、め、り、て、時、へ、く、

由、水、喪、水、  
點、頭、得、王、

と、高、ち、ふ、口、順、ぬ、覺、て、後、その、と、お、り、い、う、る、故、と、も  
曉、り、ぬ、ぬ、く、ら、後、又、辨、り、う、ら、う、と、も、あ、り、い、う、る、故、と、も  
の、月、由、ち、く、経、管、の、為、よ、二、桶、の、油、と、扛、擔、ひ、く、彼、此、と、糶、  
あ、り、く、冬、の、暑、を、こ、れ、う、速、く、夕、陽、斜、め、り、て、時、へ、く、

と、高、ち、ふ、口、順、ぬ、覺、て、後、その、と、お、り、い、う、る、故、と、も  
曉、り、ぬ、ぬ、く、ら、後、又、辨、り、う、ら、う、と、も、あ、り、い、う、る、故、と、も  
の、月、由、ち、く、経、管、の、為、よ、二、桶、の、油、と、扛、擔、ひ、く、彼、此、と、糶、  
あ、り、く、冬、の、暑、を、こ、れ、う、速、く、夕、陽、斜、め、り、て、時、へ、く、

と、高、ち、ふ、口、順、ぬ、覺、て、後、その、と、お、り、い、う、る、故、と、も  
曉、り、ぬ、ぬ、く、ら、後、又、辨、り、う、ら、う、と、も、あ、り、い、う、る、故、と、も  
の、月、由、ち、く、経、管、の、為、よ、二、桶、の、油、と、扛、擔、ひ、く、彼、此、と、糶、  
あ、り、く、冬、の、暑、を、こ、れ、う、速、く、夕、陽、斜、め、り、て、時、へ、く、

と、高、ち、ふ、口、順、ぬ、覺、て、後、その、と、お、り、い、う、る、故、と、も  
曉、り、ぬ、ぬ、く、ら、後、又、辨、り、う、ら、う、と、も、あ、り、い、う、る、故、と、も  
の、月、由、ち、く、経、管、の、為、よ、二、桶、の、油、と、扛、擔、ひ、く、彼、此、と、糶、  
あ、り、く、冬、の、暑、を、こ、れ、う、速、く、夕、陽、斜、め、り、て、時、へ、く、

と、高、ち、ふ、口、順、ぬ、覺、て、後、その、と、お、り、い、う、る、故、と、も  
曉、り、ぬ、ぬ、く、ら、後、又、辨、り、う、ら、う、と、も、あ、り、い、う、る、故、と、も  
の、月、由、ち、く、経、管、の、為、よ、二、桶、の、油、と、扛、擔、ひ、く、彼、此、と、糶、  
あ、り、く、冬、の、暑、を、こ、れ、う、速、く、夕、陽、斜、め、り、て、時、へ、く、

と、高、ち、ふ、口、順、ぬ、覺、て、後、その、と、お、り、い、う、る、故、と、も  
曉、り、ぬ、ぬ、く、ら、後、又、辨、り、う、ら、う、と、も、あ、り、い、う、る、故、と、も  
の、月、由、ち、く、経、管、の、為、よ、二、桶、の、油、と、扛、擔、ひ、く、彼、此、と、糶、  
あ、り、く、冬、の、暑、を、こ、れ、う、速、く、夕、陽、斜、め、り、て、時、へ、く、

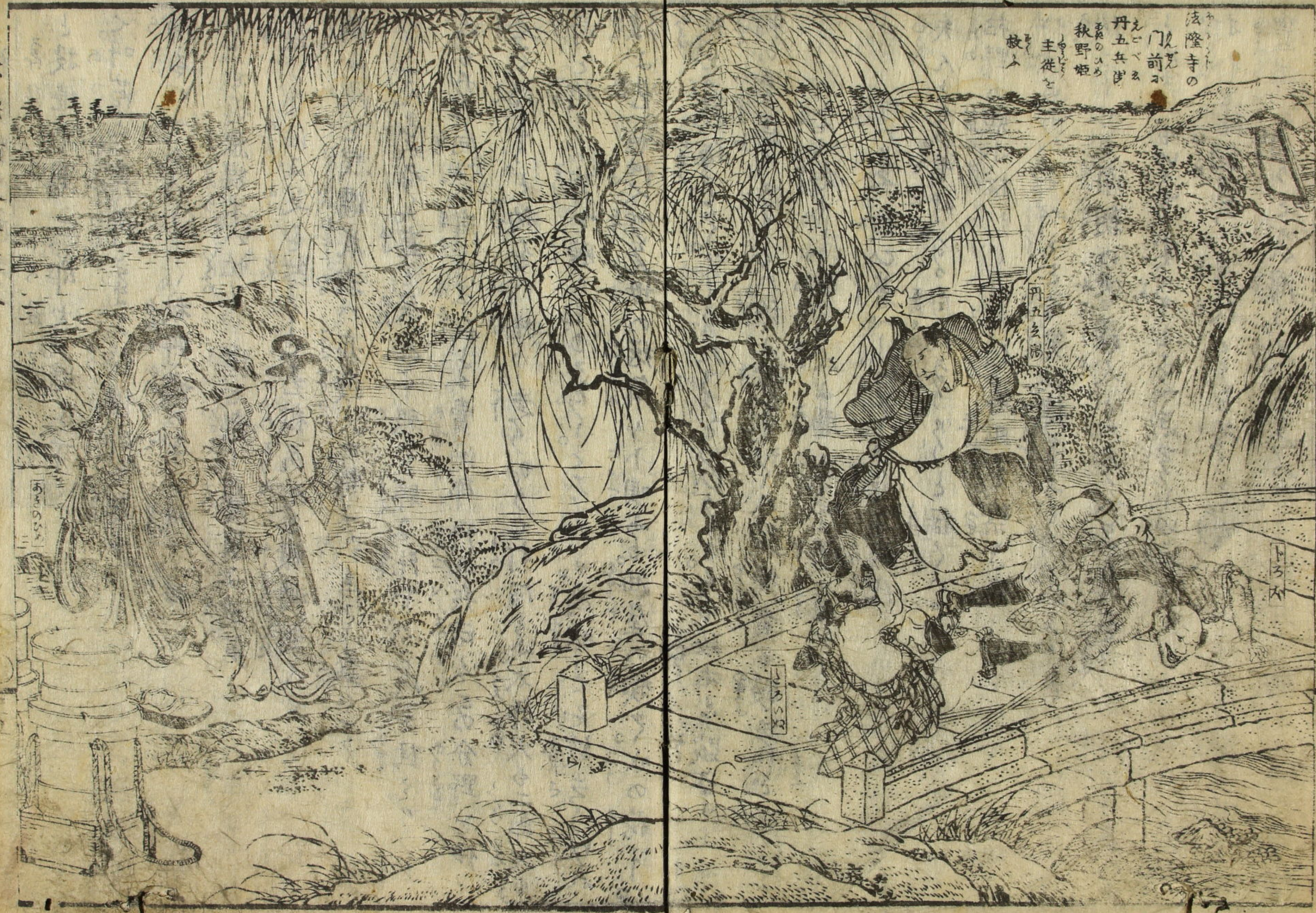
急ぐ鳥とすりふ。白石の森の蔭に。没るんとするよ。おのそく。  
 喘く走りつ。法隆寺の母とるる。石橋を羊うら渡るよ。昨乃  
 雨のまど乾うぐ。今呀初る薄氷よ。忽地足を踏上らし。  
 小膝を衝て礮と扱らま。枋を飛く向の岸よ。閃光落。二ツの  
 油桶を滾くと擣びつ。橋の左右へ走り下るよ。油を流して  
 受の踏とるもあつど。さつりつみ。と忙慌と牙を起せども。うら  
 覆くよ。油と樹をう。やうやくよ。桶のそと追ひ届て法隆  
 寺のまへに。かきおとす。はぐぐと。おのりやう。その本浅を  
 失ひさる。かきおとす。の損るれど。数升の油を日用の宝  
 物よ。空しくうら覆く。その橋よ塗る。丁と。惜とて。ゆ

夫水よ由りのち橋をう。又水と由と。二字合  
 した。油とる。さこの橋あしと。一擔の油を失へば。祥多  
 く。さくの對句。さく。点改くと。玉を流ると。ん。び。う。る。ま。あ。い  
 りん。ずん。とか。り。ん。よ。今。さら。さ。つ。ゆ。り。と。わ。く。し。と。う。改。を  
 病しめ。只。忙。務。と。て。立。在。か。撞。さ。か。り。ひ。入。相。過。だ。い。油。恋  
 じ。野。狐。の。火。さ。り。ご。ろ。よ。う。ん。ふ。り。浩。如。の。杖。野。姫。を。打。景。  
 豊浦をええ。川の向ひ。大。門。と。則。法。隆。寺。を。う。ら。ま。り。さ。あ。り  
 暇。と。り。の。べ。い。と。い。ひ。も。果。ど。轆。の。後。方。よ。著。と。り。る。草。履。を。取  
 く。う。寄。と。れ。ば。二。郎。犬。を。笠。と。杖。を。さ。り。と。豊。浦。よ。遠。み。し。  
 中。を。さ。遠。簾。を。反。揚。と。り。當。下。豊。浦。を。橋。の。戸。口。よ。ま。り。と。り。

秋野姫を技出し進みよるよ。二人の悪棍ハ右より左より。その顔  
をくら観るつ。太郎犬かひ入す。二郎ハ行とる思ふ。とめらう  
この女もと。平人あらた。と大なる措き。日を暮る  
小。まをの尻を貸し。り。を放す。宝の山入る。手  
手を空しくするの。計の奴原より。手首を豊浦  
より。とり。二郎犬。息吹。れ。よ。吉野の内裡を迷ひ出。乳母の懐。二色  
か。冬枯。ち。長閑。春よ。山吹。持。とお。その金。ま。眼  
閑く。も。出。黒。手首を豊浦  
か。懐。挿。と。女。主  
従。と。悔。よ。南  
朝。の。零。落。人。誰。は。誰。か。は。い。従。者。も。老。し  
の。先。へ。走。し。替。力。人。は。勝。た。る。若。黨。ハ。望。目。の。御。中  
今。ハ。追。ひ。著。べ。し。さ。く。も。命。ハ。缺。代。ヤ。あ。る。二。ッ。目。を  
失。ん。と。鳴。呼。る。白。袴。と。猛。く。ハ。罵。ま。さ。化。し  
枯。野。の。姫。小。松。引。く。由。り。心。懸。を。禦。難。風。情。悪。棍。ハ  
ハ。合。笑。以。健。氣。ハ。目。二。目。法。師。ハ  
拈。て。南。朝。の。零。落。人。と。人。を。従。者。野。あ。る。と  
と。童。も。の。で。実。と。と。と。と。詮。り。行。る。聖  
打。付。を。聞。さ。つ。息。杖。を。う。ら。振。り。左。手。右。手。う。競。ひ。蒐。り  
豊。浦。を。閃。り。と。久。滞。り。足。を。と。と。太。奔。犬。ハ。筋。斗。う。て。撲。地

枕草子

二



法隆寺の  
門前  
丹五兵衛  
秋野姫  
主従  
故人

丹五兵衛

秋野姫

丹五兵衛

秋野姫

丹五兵衛

秋野姫



より成林十年の年を身うとていつていよ。さてとひ心志をまぬ。妹  
夫の中より一子の孫松が往方うとて世あしうのあはれと  
思ふおひひや。夫婦らみと違んとい。神のまをて誰くもさし  
恩養の為よ形をたすを捨やとて給事。守冊さす。姫君へ人  
よりいども。過世あしう。草あも木あもをををかく山迹の  
六田の里あも住うねと。将場の雄子音小鳴のまひるたまの家  
隸も世とく時とく浅中た。菅の小笠は旅疲。常身の汗夜  
賣油郎人のゆくと行水の河内は名とて教らうの楠殿の新  
婦君と正武ぬの老臣が。あまはる果飲とうれ口説外あはれと  
袖の雨笠せうと見くちやう。兵侍はやうやく改を擣く。秋野  
姫は稟とやう。幼少く在せとたよ。身退れくゆを姫君の面影  
。海りなまぐらうのあはれほど。千叙破の城の没落。吉野の帝。入洛  
すませうのあはれ。世はやくもゆゆの故主の往方うとてやとて  
かたおちをたおま。豊浦をねくまをせう。同どてをまあう。  
彼悪棍木を追ひ退け。恙るにめん容止をえあう。飲びられ  
ふちとりのやゆと。抑兵侍が。叙正武をのゆ不審を被り。迹  
を暗うせし首尾と。一朝は述由竭一がけと。その後やふさし  
訳べし。のち後まきまう。小世を厭ふを度り。この法隆寺へ来  
る。類は改判を存らう。墨深の衣被まぬ。と希人ふ上人一  
切許しあふむ。汝が宿業のまをそと。今より後十年を待たず  
忠義を全うする時あべし。と諭し。身は後。遂はその志を果せ。  
とていこころのまをそと。身は口ごも。鯛ふしうけまは。



油を賣りて活業と。丹五兵衛と名を更く。ややくその日  
 を送るも。形を商人の如く出家及び一初を弓前よかえり。  
 清く由よめる水油園を築くを思ひ。仏の慈悲を祈る乃  
 外に他るものゆひを。今も今も今も。姫君の危窮を救  
 へり。別ましく久しに妻ふと環會。是彼をひ合されば。昨夜の  
 夢にて。水と油とね。水と由く水を喪ふと見え。嚮は彼知るの標  
 の羊八二桶の油を覆し。その油よとて。狐く悪棍を追ひ  
 送り。点改しく王を召すと見え。故主よ逢ひあり。王の改り  
 を加まば。主の字とす。方よは姫君の危さよありあり前  
 象あり。ゆひし。ちる疑人づう由ありぬ。三位中將の正成  
 神天が。枕よましく告り。るる。ん。ゆるみ。いと信ずふ。ある。

豊浦ハヤと。秋野姫も世よ憑りた公持し。正武病死の  
 りん。標丸の往方志とせり。野の年を経るごと。  
 文野前の自害の。正勝正元没落の。物を。らちほえ  
 身よ。兵衛と。毎よ嗟嘆しく。又まうと。らハ緯と。漢  
 小便り。法隆寺ハ。楠氏累代所縁の蘭若あり。ちうと。見  
 糸。の。の。て。慈く寺内へ。法。の。老僧  
 一。緯の。を。せ。住持の上人。秋野姫は。面  
 旅路の疲勞を回慰め。実又正武の物故。姑文野前。自刃の  
 り。悼と。追福の好。公。叮嚀。経。一。  
 重妻射の。家。の。假の宿りを厭ふ。あ。ね。の。艶妖  
 たる女主従を。僧坊よ。舎。難。る。丹五

兵傍か草舎ハ。あまうよあまうらん。うぶ山の菜園ハ。世よ  
 去らる。知る。今宵ハ彼如く。睡りぬ。いと。切な  
 待り。夜。行童。夕膳。主従。前。安排。秋野。姫  
 へい。悲し。あひ。丹五兵傍夫婦。も。安堵。で。夜  
 うら。上人。庇。飲。非。果。上人。後堂。  
 今。主従。蕙。引。同。ゆ。名。の。さ。う。相  
 語。丹五兵傍。正儀。の。消息。を。赤坂。の。城。へ。赴。たり。  
 緯。の。越。を。物。様。井。の。兵書。紛。失。往。方。を。打  
 嘆。小。豊。浦。を。嘆。嘆。息。故。主。の。枉。死。も。見。果。ぬ。夢。散  
 と。述。る。様。井。の。兵書。の。ゆ。ゆ。と。惜。け。ど。その。悔。て。久。る。か。も  
 結。む。只。秋。の。に。姫。君。も。異。る。る。も。在。さ。結。髪。の。

標丸。環。會。進。交。野。前。の。遺。言。を。化。よ。せ。ん。と。夫  
 婦。か。又。忠。義。の。大。刺。の。寂。す。世。を。潜。る。便。宜。多  
 べ。ん。と。女子。の。宿。る。知。す。ね。却。人。は。疑。は。る。六。田。の。落。宿。を  
 出。と。此。男。君。の。そ。ろ。も。ひ。路。費。も。懸。け。る。と。あ。ゆ。ゆ  
 の。あ。ゆ。ゆ。隠。家。を。後。理。ゆ。と。信。ち。は。密。結。を。兵。傍。と。あ。ゆ。ゆ  
 沈。吟。し。く。声。を。低。う。足。利。の。追。捕。忽。と。あ。ゆ。ゆ。大。和。の  
 壁。ん。と。危。し。浪。速。と。繁。華。の。地。ら。れ。ど。も。彼。知。る。る。母。楠  
 氏。の。舊。恩。と。あ。ゆ。ゆ。の。も。あ。ゆ。ゆ。主。従。彼。地。を。牙。を。階。し。故。中。の  
 標。丸。の。お。ん。往。方。と。索。ふ。と。あ。ゆ。ゆ。姫。君。も。豊。浦。も。あ。ゆ。ゆ。べ。ー。と。を  
 送。ひ。ぬ。か。く。主。従。老。僧。は。僕。也。と。見。え。茶。園。を。草。堂。と。赴。ぬ。  
 う。母。来。し。と。終。末。の。り。瓜。ら。相。譚。る。と。あ。ゆ。ゆ。冬。の。夜。ゆ。短。く。覺。え

あが丹五兵衛も。伴の路費二百金とめりて。詰旦浪速へ  
起行。尾摺の上は油店を関れり。家号を山迹家と稱。是れ  
八重んといふ。主君。兩三人と兼り。廊のり火主とす。ゆび法  
隆寺へ來到り。上人は縁の趣をさすやれり。故郷の妻を  
女児と名づく。と偽りて。豊浦の名を阿也女と名づく。更  
秋野姫と名づく。何と名づくや。と問ふ。夫婦竊に高嶺と名づく。よ  
豊浦より入る。曩に生むて。移りて。墓多かりし。女児が  
面影。彼姫君より肖りし。今更に主従。歌子と名づく。因  
果あり。追ひ遣ふ。淡松が妹といふ。思ひに。世をわ  
子の名を家とす。阿也と名づく。えを。と。いひて。涙さす。あ  
丹五兵衛も。笑ゆ。いと。さる。と。や。あ。ん。ま。ん。も。秋の野  
のせの葛紅紫。淡と。松と。係と。い。霜の後。標丸と。再會  
あ。と。せ。な。る。と。多。く。は。淡と。名。け。な。ん。も。あ。と。淡と。夫婦  
通路より相詰り。秋野姫より。と。ま。う。せ。ん。姫も。よ。く。あ。の。後。を  
ゆ。浪速に赴く。その日。丹五兵衛を笑と。豊浦の阿也  
女を母と慕ひ。假初より。孝行。夫婦。を。若。り。れ。と。淡  
お。淡と。名。づ。る。名。ら。も。よ。あ。ぬ。人。め。の。関。越。う。後。と。只。お。の。眼。  
り。る。と。あ。の。と。涙。り。

○第六 蘭より

又。芝の。世。あ。ら。う。我。の。色。小。香。よ。袖。う。り。人。の。舞。樂。の  
る。と。ま。り。條。あ。ら。う。な。ん。世。も。田。樂。と。い。ひ。の。出。立。と。  
り。ら。ら。れ。を。弄。び。つ。岡。里。より。あ。く。槐。門。よ。る。び。の。舞。曲。よ。高。足



松濱村史卷之三

四十五元

一足腰鼓振鼓銅鏡子編本殖女養女木の教種あり。ら様樂乃  
 一斐くさりのことぞ。ひまぶその起る如きとぞ。むう郁芳門院院の皇女あり。聖茂の齋僧あり坐甲。皇太后と稱へたまはれり。珠よとの能藝を好せむひくは姑射仙  
 宮の内よえ。呂催さんや。田樂江覽のり。まむくうり。のの後五  
 十五代の帝。後醍醐院の元弘年中。まほ洛中。堪往の者。多く  
 集り聚ひく。後食の高時入道。本座新座の田樂を唱べ下し。  
 日夜よとれと舞踏し。まづもゆの戯をりて。遂よとの康をきく。天  
 下南北朝とらうんつ。北朝の九十七代光明院のふん時。貞和五年のち。  
 田樂よと田家の樂よとよ。その舞曲よ。殖女娘女よとよ。名目  
 あり。殖女よと田と殖る女のり。養女よと。蚕娘よと女のり。あや  
 田と殖。蚕を娘人。ま田家常の業あり。それよ打扮て舞まれば。  
 田よとよ名けり。ままのりよ。亦一説よ。今の世よ。豆  
 腐を短冊形よ切て。木の串よ貫き。糸り味噌を塗く焼を田樂と  
 稱る。彼が舞踏よと。長尺竿よ携る形容を名ひく。らの名を  
 願う。思按よ。放下刀玉。田樂の所作。田樂廢れて  
 放下僧といひの出来。そのら放下傍も。又廢さく。今ハ上竿伎  
 のあり。刀玉。今と品玉と。法苑珠林よ。西域の女戲よ。五人  
 三刀を傳弄し。加く十と至る。これ刀玉と。駒谷山人のり。  
 匡房卿の洛陽田樂記と按よ。高足一足腰鼓振鼓編本殖  
 女娘女木のり。の曲目あり。その打扮。或々九尺の高扇を捧  
 或ハ草蘭笠と戴る。或々蒿の尻切を穿。或ハ裸形あり。腰了

紅衣を卷き。或は髻を放く。田笠を戴く。と見えし。さるに院  
中上白河の侍臣仰よりて。その戯をりし。文安田樂能記。三月十  
七日。後花園院の皇子。伏見殿。田樂御覽。同十八日。將軍義隆の御祝。今出川。義規。田樂とを  
うへせし。と記し。文安の。後花園院の御号。明徳四年より。五十六年。後多れ。と云ふ。  
田樂の。の番附あり。

勢田の春敲門の能

女沙汰の能

北野物犯ひの能

尺八の能

あららの能

書字の能

法然上人の能

小野小町の能

屏風の能

実方の能 以上十番

三月十七日伏見殿を過しと觀せり。次の日の番組へ八番へ。悉くし。寫  
えし。さるに院中。の侍臣仰よりて。その戯をりし。文安田樂能記。三月十  
七日。後花園院の皇子。伏見殿。田樂御覽。同十八日。將軍義隆の御祝。今出川。義規。田樂とを  
うへせし。と記し。文安の。後花園院の御号。明徳四年より。五十六年。後多れ。と云ふ。  
田樂の。の番附あり。

南北兩朝の天子。おん和睦す。天下ややく一統。万民安堵。乃  
おひせり。後同四年三月の。お軍。利。満。云。四條河原。棧  
敷。を。打。く。奉。座。新。座。の。田。樂。を。興。行。し。中。園。柳。營。の。貴。族。より。洛  
中。の。士。庶。ま。至。る。ま。ぐ。放。よ。と。觀。せ。り。年。末。の。軍。役。と。勞。ひ。且。養。平  
の。時。と。祝。さ。さ。す。と。云。只。官。の。り。伏。見。出。され。し。官。領。四。職。の。老。臣  
眉。を。擧。め。さ。り。終。も。小。練。さ。す。や。り。曩。祖。尊。氏。公。の。お。ん。時。自。和  
五。年。明。徳。四。年。は。望。下。六。月。十。一。日。祇。園。の。執。行。行。直。と。云。か。の。大。平。氏。は  
の。め。り。四。條。の。橋。を。渡。え。し。奉。座。新。座。の。勅。進。田。樂。を。興。行。せ。り。  
と。云。り。撰。祿。の。大。臣。大。樹。座。長。賤。の。僧。俗。ま。至。る。ま。ぐ。四。條。河。原。に。棧。敷  
を。打。く。と。云。れ。と。記。し。一。の。筋。ハ。奉。座。の。阿。古。乱。拍。子。ハ。新。座。の。彦  
夜。叉。刀。玉。と。道。一。と。云。ふ。の。く。堪。能。を。号。と。云。れ。と。記。し。や。その。曲。由。果。て

公余吉史卷之三十一

のち新座の樂屋より。據樂を如く。その様いと微妙弄踏りたり。忽地よりあり。不慮に命を墮し。數百人は暨べり。河原に先蹤不吉あり。前車の覆りたり。後車の戒と志あり。此度も災害あり。量り。努力ひきまう。と。おそく。稟せ。満中より。冷笑ひ。汝達も。只その一と。と。その二と。と。負和の昔は。是利の武威。い。ま。全く。振り。と。夜又天狗。と。動も。これハ。その隙を窺て。さ。禍を起。今。満。時。至。南帝。を入。進。東。西。の強敵。討。成。四。海。一。め。異。萬民。今。天。日。と。獨。樂。と。衆。と。衆。と。衆。と。衆。と。棟梁の。或。臣。と。これ。對。と。女。と。女。と。女。と。女。と。と。氣。を。い。ひ。微。と。衆。皆。再。と。諫。と。汗。を。流。と。退。と。と。件。の。老。臣。と。聚。ひ。と。議。と。貞。和。五。年。の。田。樂。と。天。狗。山。伏。の。為。と。野。の。人。と。教。と。と。世。の。い。り。り。と。此。度。の。田。樂。と。終。驗。の。山。伏。と。禁。と。棧。敷。の。中。へ。入。と。且。非。常。の。衛。護。肝。要。と。と。供奉。の。近。臣。と。と。と。と。番。卒。と。と。の。旨。と。下。知。と。と。時。と。明。德。四。年。三。月。廿。五。日。と。田。樂。與。行。の。奉。日。と。定。と。と。將。軍。義。満。公。千。の。比。及。一。室。町。花。の。川。所。を。出。と。と。斯。波。葉。竹。山。の。兩。管。領。四。職。頭。人。既。近。の。武。士。殿。上。人。上。達。部。と。と。野。の。棧。敷。と。入。り。と。洛。中。の。貴。賤。と。と。去。程。と。楠。河。内。二。郎。正。元。と。去。年。の。冬。六。立。べ。う。由。と。と。去。程。と。楠。河。内。二。郎。正。元。と。去。年。の。冬。六。

公保書入卷之三十一

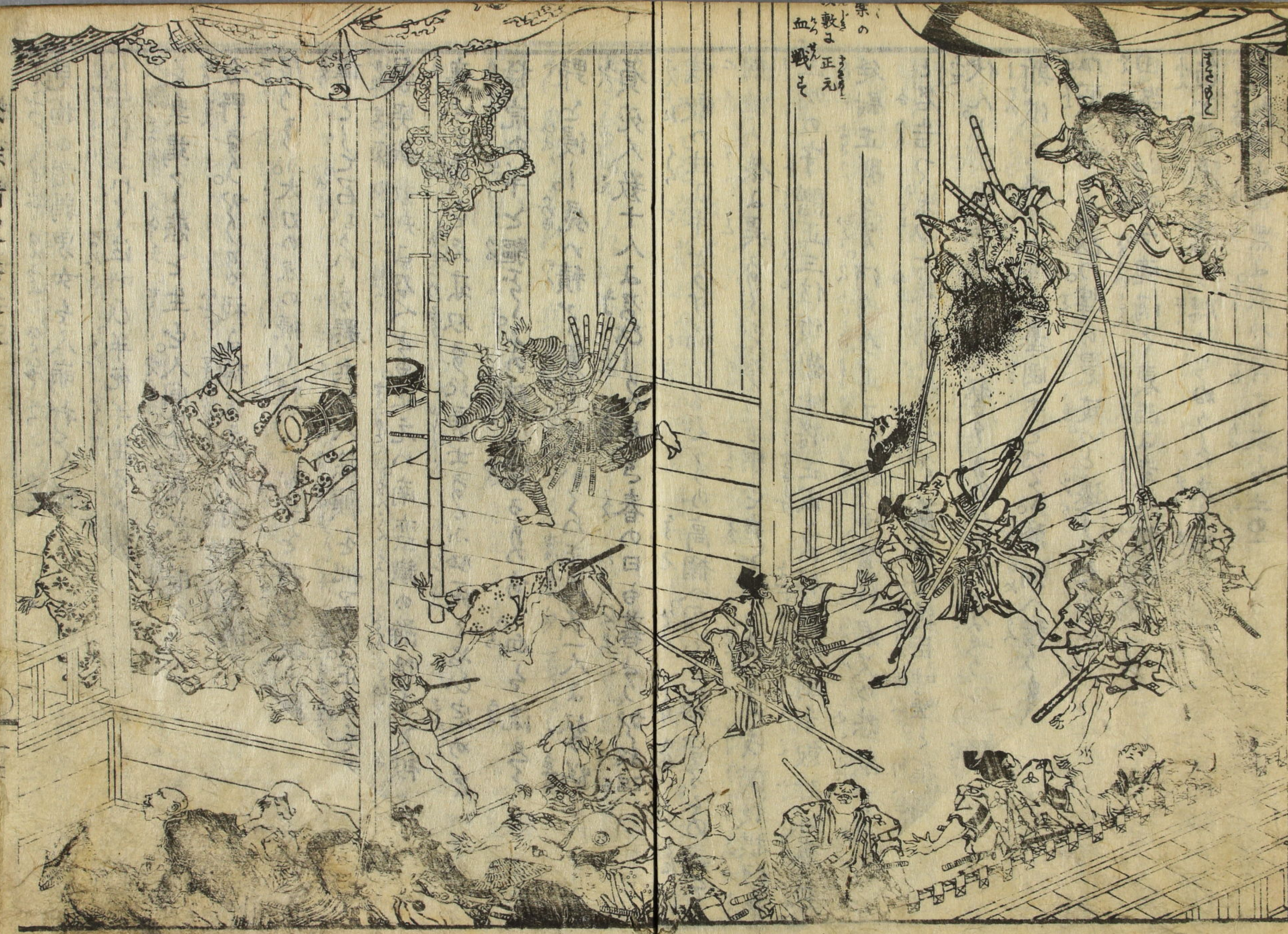
二一

田の旅宿あり。妻を喪ひ嫁は別居。洛に潜びたり。君又の  
 仇人將軍美満と相撃んとす。答は森戦と枕し。竊は便宜を  
 うらぐども。足利の武威烈しく。夏の日は異なると。草木も靡  
 ハ際をみる。いつとも二年も暮。春も三月よりふれど。さう見  
 て。也を對する。さうさあ。霞もなほ。標丸の。秋  
 野姫の往方。いつともあつんと。あひなれば。越路へ歸る天津雁。篠前  
 脱を。恙も。世と。水莖より。岡より。あつし。山。昼も  
 馬の奥は。隠れ。さう。洛中と。非細。あつ。部。野の  
 乞見。打扮。さ。或と。終験の山伏。打扮。室町の。所を。窓  
 窺。行。三月。さ。の五日。あ。招軍。美満。四條。河原。あ。田樂を  
 喬。さ。う。豫。風。声。あ。し。さ。時。至。ぬ。と。深。く。飲。び。奉。日。ハ。早。且。し。う。  
 篠。袂。は。兜。巾。し。長。ち。る。太。刀。を。佩。綱。代。の。笈。を。背。負。つ。金。剛。杖  
 を。衝。鳴。じ。假。山。伏。と。さ。う。し。河。原。は。甚。さ。群。集。の。老。弱。さ。う。難。し。さ。に  
 時。刻。を。さ。う。後。亭。午。の。比。は。大。樹。棧。敷。は。入。り。あ。ひ。ぬ。と。響。動。さ。う。し。  
 衆。皆。走。り。騒。ぐ。後。方。は。跟。り。正。元。も。東。の。本。門。さ。う。入。り。と。さ。う。い。は。ん。  
 幸。木。桿。棒。を。左。右。さ。う。投。げ。て。遮。箇。汝。さ。う。さ。う。さ。の。田。樂。は。山。代。を  
 禁。制。さ。う。さ。う。退。れ。ゆ。と。い。つ。め。制。さ。う。正。元。も。これ。を。さ。う。て。あ。つ。も  
 打。扮。さ。う。さ。あ。ひ。る。が。騒。さ。う。さ。う。さ。を。さ。う。さ。れ。ハ。越。路。へ。順。の。峯。入。り。す。る  
 修。験。者。さ。う。道。の。次。は。洛。中。洛。外。の。神。社。仏。閣。灵。宝。灵。跡。を。さ。う。さ。う。さ。う。ん  
 と。杖。を。活。さ。う。さ。あ。つ。か。社。親。は。さ。う。さ。う。の。生。涯。の。幸。さ。う。ら。ん。と。飲。び  
 以。つ。る。さ。う。の。入。さ。う。の。奉。意。さ。う。さ。う。さ。う。一。曲。を。さ。う。さ。う。と。い。ひ  
 由。果。さ。う。さ。う。合。さ。う。棒。の。上。を。碎。さ。う。踏。ん。と。さ。う。さ。う。番。幸。木。大。れ。り



怒り。くら狼藉あり。傳はどや貞和のむし。お軍する氏公。み河原あて  
 田樂を齎せり。天狗山伏の怪異ありて。野の人を殺し。その故に官  
 領家の下知より。久々山伏を禁制とせしむ。其のむし。行々  
 内へ入る。さ。蓋の膚を動し。傳はどや。罵りて。正元を。さ。ど  
 念く。掛棒を拂ひ退。本カ。内へ衝と入。痺者ぞと。猪を  
 背より。面より。組。闘く。物を。金剛杖。さ。て。  
 當り。隨。打倒し。棧敷を。傳はどや。西面。高欄。紫の幔幕  
 引。兩の紋。著。お軍。上。坐。光。師。公。卿。武  
 士等。それを。用。繞。その。為。俸。風。流。の。綺。羅。を。そ。ど。い。り。り。  
 正元。それを。盲。龜。の。浮。木。優。曇。華。の。春。の。人。お。持。て。此。由  
 擬。淺。ど。及。搖。捨。衆。万人。群。集。頭。の上。を。飛。越。下。る。於  
 棧敷の柱。手。を。り。仰。上。る。心。の。高。欄。へ。閃。と。攀。登。る。その。疾。こ。と  
 樹。傳。人。猿。も。異。り。登。り。由。果。ぶ。声。と。あ。ま。つ。小。矢。滿。故。掛。河。泉  
 三州の守。贈。正。三。位。近。衛。中。將。正。成。の。孫。河。内。國。千。劔。破。の。城。主  
 廷尉。正。勝。が。才。河。内。女。正。元。と。謗。り。や。累。代。君。父。の。怨。敵。へ。因。に。に  
 と。名。告。つ。太。刀。と。抜。翳。く。打。く。菟。ま。心。近。臣。吐。嗟。と。推。搦。組  
 伏。ん。と。防。ぎ。殺。ひ。矢。庭。に。怒。り。の。八。九。人。も。及。ぶ。り。その。隙。に。其。請。の。ハ  
 斯。波。多。將。紫。竹。山。基。國。ホ。と。ね。く。隣。棚。へ。移。り。も。ひ。が。か。て。室。町。の  
 几。所。へ。歸。り。も。ひ。つ。緯。の。景。迹。つ。と。遠。く。と。え。え。い。それ。が。今。こ。こ。を。誦。ね。る  
 田。樂。法。師。ホ。ら。魂。消。く。東。西。よ。ま。り。深。ま。或。と。堵。と。失。ひ。く。鼓。と。抱  
 笛。と。握。り。ち。ら。ち。ら。腰。ら。ぬ。く。と。ま。り。顔。色。も。素。袍。の。袖。も。等  
 く。花。田。も。黄。黒。も。或。ハ。青。く。或。と。土。の。ど。り。り。伶。人。も。尋。り。す。ん。く

果の  
敷は  
正元  
血の  
戦と



見物の老弱男女を人前打く慌忙ひびくは婦幼尼法師も  
 八道仕まれば泣叫び羊死羊生るりのいつてむくそとのみりとも  
 樂場悲と生ど人間の苦樂只一瞬の中もあり目もあそれぬ  
 分野ありかりる程は楠正元と將軍茂満云を撃漏らして退恨  
 限りまゝ太刀の刃の続く程と敵手を擇む挑み幾あふ非常乃衛  
 護として召あられる野兵百人陰襖を他アと正元をさう圍む奮  
 撃突戦敵刺又及ぶども正元は南蛮鐵の濂帷子と被さる浅  
 疾ぶも負むえお双る死勇士あるふ必死と必ひ定めえればえ  
 猛虎の羊と驅ぞその降は當るりのあり血を流まゝ逐鹿乃  
 野と浸し屍の積ぐ累々かかへ正元一人は怒惱され手  
 負死人数十人なるびりく長き春の日も暮るかた強敵をさ  
 込さぶ忌くしにふん大事るるべしと紫竹山基剛討手の大おそ  
 うけぬらりまぬく兵士を倍加らぬ楢麻竹葦ふり巻る美  
 火挑灯々見星は異ありとんと正元とる海一足も退くむら  
 むらりの猛しとどもその牙は石よありされば今いけうと必ひ絶屋  
 の棟を突破りて檜の上より登りつ天を仰ぐ長嘆し後主降く  
 姜婁維か謀成らむと嗚呼天をれを喪せり天を道を喪せり夫善悪  
 正邪因果應報の係る所一旦の利運はもうと近連あり久しく曲  
 がる足利が武威は誇るるも哀の時くる人やさよ寄る討手の  
 大將を紫竹山と見らハ解目欽正元が死首取り功名話説えと  
 かりハ腹さるやうともうく見れんと後中も語り続ご汝亦が運場  
 るんと死の手奉よせよと叫びくわら肚甲の上帯切く捨血刀を

松原清史卷之三



ころる海し。左の肚へどきと突まきうくと引繞らんと。さぶらう腸  
 を廻し出し。あまのうへに投著く。まよる終よ死しうる。その勇敵  
 小恐怖まじく。ふやうが短く近づくの由まよる。うねいぶとよ。うち膝  
 へ居し。が兵士四五人。屋棟よ登りう。さぶ陰の澤頭を力く。突  
 動し。うるふ倒まじ。まじく。やその死をを見究めし。遂は首  
 を取し。うる。かきく。次の日正えの首級を日岡の山陰へ梟られ  
 う。是をみるりの堵のむ。朝の豫讓ふく。田横か美を煮し  
 とく。その忠孝勇猛を唱嘆せむ。はるうり。そのりや近  
 小い。まじうり。浪速なる山迹家丹五兵衛。その妻阿也女。  
 小珠とよ。は驚き悲し。志のびく。まじうり。歎き。丹五兵衛かみ  
 中。是利どく武運高大まじ。正え。遂は復讐の奉まじ。まじ。  
 遂のへど。最期の形容とをひきかみ。遺恨とを推量らんと。  
 まじうり。まじうり。あまねど。その歎きとまじ。まじ。まじ。  
 かん首級と馬の蹄まじ。うけまじ。へい。折を。まじ。直し。はまじ。  
 上り。夜は給まじ。盗まじ。まじ。まじ。寺院へ葬り。まじ。  
 忙しく行装。従者を。俱せ。一人十三里の道程を直まじ。  
 小まじ。その日の暁昏。小京へ。著ぬ。甲夜の間の往來。由迹絶まじ。  
 守る人も油断まじ。と深念まじ。小夜の深るをまじ。春の夜  
 まじ。短く。まじ。人定由過まじ。頃。廿六日の善惡。由まじ。ぬ。圖  
 まじ。夜を。まじ。滑び。まじ。番卒。ホ。焼捨。無火の。何まじ。小  
 睡臥まじ。丹五兵衛。まじ。時分。まじ。と。是を。まじ。まじ。  
 正えの首級を盗まじ。袖よ楚と。うけ抱。まじ。まじ。まじ。まじ。

新撰平家物語

十一



久米村の戦



正元しょうげんの  
首級くび  
奪うばんとす  
廿五にじゅうご兵衛  
度たび袖そでと  
失うしなふ

木津川



九

勇を奮ひて。一方を破用也。鳥夜に紛まきりちてや。往方も  
 ちとどろりふりり。かくく丹五兵衛を幸とく日岡の危難  
 破脱通霄走りつ。次の日浪花へ立寄る。ふり既し学し功  
 ろ。正えの首級へ何りのともあつた奪ひ去つ。こが隻袖を取  
 る。の。教り身方う。とそまううさぬ思ふ。はやくこひ合  
 うもろ。い。安うなば途みく日と暮る。尾橋る。己  
 が肆ふぬ。えふれば。河也女が深へ待らびく。忙しく出送長途  
 の疲勞を同慰めるとする。ふ主管是非八も。小廝ホも只活業の  
 りのあうて。環りて入行する。とあ人気色多れば。丹五兵衛  
 へ此二ちわく。さて夕餐とる。その間又阿也女と夫が脱捨  
 する。衣と奪む。その上は被らし。下は籠衣く。めり。かき引  
 放つ。左の袖へ断離く。その不審とあ人。その夜是非八  
 と小廝ホを臥し。後ふ。親子二人蒸襦と籠く。海の中を  
 向ふ。丹五兵衛を仔細る。物とせ。守る人のいとま。左の  
 奉立を遠ざけ。阿也女再と。宣へ。さうゆが左の  
 袖より。このひ。と問。丹五兵衛答く。彼隻袖は今朝  
 一由定の江船より。帰る。岸の茨引。断離  
 する。と。由。と。欺く。阿也女。母ら。り。子  
 け。今。宵。夫。が。い。づ。と。帰。る。よ。早。と。失。ひ。く。ち。ひ。そ。め。く  
 打。る。れ。ば。う。さ。ね。く。い。ひ。由。土。む。次。の。日。囉。齋。の。物。を。し。て。  
 昼。由。家。廟。の。御。燈。を。進。り。香。り。を。え。く。お。深。り。終。る。も。  
 密。に。正。え。の。菩。提。を。吊。ひ。ぬ。か。く。て。三。月。由。尽。く。四。月。由。一。年。三。日

公孫清史巻之三

三



四日といふころ。年紀三十の年。武士の浪人とおぼしむる。皂  
 羽二重の小袖も。申の時よまぐとしく。尻のあつ。うらむ赤す  
 る。一ッ被く。月代五分むろふ伸し。これ帯を結び。床  
 室の両刃を跨へ。煤漆する編笠を脱捨つ。呼門しく。山迹家  
 店前より。上座ふき。と推す。主人は達んといふ。その形  
 容。面色白く。眉黒く。髯の青く。唇赤く。黄き。扇笈は取ら  
 居丈いと高し。室ふ一癖ありぬ。面縛るれば。小所おは。つ  
 らう。五分の怕害を生く。遠く上人は。癖の趣を告る。丹  
 五兵衛の。懸く。立出と對面し。懇懇ふその姓名を問ふ。彼  
 武士答く。これ山家税平と呼ま。年々京浪連の間。一  
 僑居し。劍法の師範よりあり。志もふ。下下の合愛。お深と

さん。要る。宿縁あり。故に請ふ。其歴を説の。そ  
 う。お深を出し。逢し。一人といふ。丹五兵衛とこれと。つ  
 まむ。果は。顔うら。親。を。狂人。といひ。う。い  
 言。を。卑し。あり。ひ。け。ぬ。さ。ご。ま。う。賤し。商人  
 の。女。見。を。要。ら。ん。と。宣。ふ。と。さ。よ。る。れ。僥。倖。る。れ。ど。只。お。う  
 の。女。見。を。れ。ば。さ。あ。へ。を。背。を。振。る。べ。り。也。加。支。被。ふ。一。や。結  
 髪。の。夫。あり。さ。縁。を。れ。よ。と。い。ひ。せ。由。果。は。税。平。の。阿。と  
 う。ら。笑。ひ。その。根。女。婿。元。来。所。予。あり。う。れ。あ。の。既。に。煤。灼。あり。と  
 姻。縁。を。締。べ。る。よ。外。小。結。髪。の。夫。あ。ら。う。も。覚。む。お。深。が。夫。と。い。ひ  
 何。れ。の。名。告。ふ。と。い。ひ。へ。と。い。ひ。せ。と。の。声。の。や。高。く。あ。の。や。ふ。平  
 也。女。由。お。深。も。さ。行。る。や。さん。と。お。ぼ。つ。ら。う。ん。出。居。の。さ。る。暖。簾。の

陰に在。且竊窺。且竊伺。丹五兵衛の騷ぎたる気色も多。援平に對ひ某のん月よ女見を妻とん。假ふ由約結せしものへおぼ。行人の媒灼せし。まづそのりのうら名告あつし。いふ。税平へさのこごとと冷笑ひいひ。中媒灼をさす。それをもへど。奪ひ、懐中より丹五兵衛が隻袖をとり出さく。左手より高くさ驚し。泰山いふ。それを怒まう中。同よ。丹五兵衛の大蛇に驚れ。膝一く。そんところ。手首丁と拂ひ退いぬ。三月廿六日。大津よあつた。丑三ころ。路いと闇を日岡の山蔭よ来りまはる。楠正元が首級を盗とそんところ。滑びうする癖者あり。それを脱ぎさく。番卒おが。打つる刺殺よ。鞋の袖をうれとさ。是必死と残ふ。おのれ。行らうとそんところ。忍びど。そり復し。隻袖の色も花田よお深か媒灼かくく。由固辞や。変改さるや。否と。之ハハの袖をさく。紫叶山よ。宿所よ。赴き。審よ。辨免。正元が首級よ。さく。油の同九丹五兵衛。さく。同よ。と。楠。残黨あり。といひ。縁一と。締べ。その袖の。腕と。よ。憑る。背翁ハ。お子よ。手。推辞と。い。の袖の。腕失ふ。妻子も。同罪。さく。同。さく。胸中。隻袖も。と。名。さ。り。ま。し。麻糸の。有。の。二。丹五兵衛の。苦し。死。隨。よ。あ。ゆ。り。世。ん。滑。び。の。入。り。く。物。伴。り。く。由。女。見。と。呼。ば。主。君。の。息。女。と。素。姓。由。お。た。ぬ。瘦。浪。人。の。妻。ふ。せん。や。それの。さ。る。と。ご。姫。君。の。操。丸。と。さ。う。と。夫。あり。つ。お。身。と。持。の。致。る。な。ど。楠。氏。乃。餘。類。と。さ。る。と。ご。の。姫。君。の。人。由。危。し。と。せん。と。む。り。り。今。さ。く。股。

公衆昔の巻之三

二七五

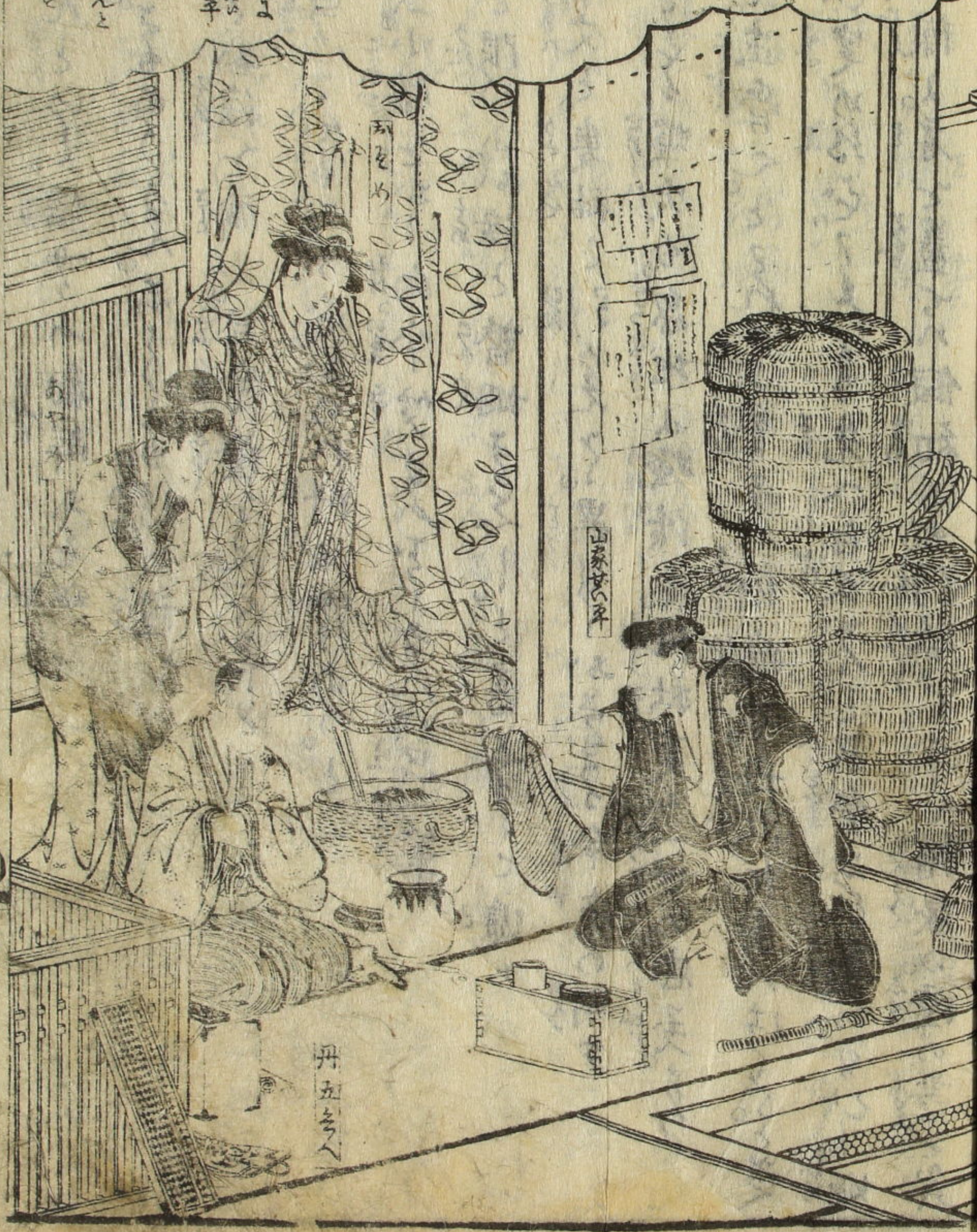
袖の。うらそをゆくひるりり。ふ深ハゆくは堪ぬと。まき生  
 つ紙剪の小刀をふとく。呪へ突立人と志すくく。阿也女ハ  
 吐嗟とまき出丹五兵衛り終ると由小右より左より抱て面ごと  
 物中抱へらん。自又見えん何れもどと。禁顔とらり親り。涙ハ袖  
 小ふり。親の難美ゆくりの思切少て別れても。結髪の際在  
 小標を破り身を汚し。他一夫小伴は百年千年存命るとも。  
 世はあつひの侍とんや。今面あつる墓るり。あつる。娶らんとみ入る。  
 身も後く袖ゆくり。是彼ア長と結ぶ。柳の糸を墳標で常の  
 風ハ誘ふとも。あぬえのゆも靡ぬ女子の標を遂さく。とく口流つ。  
 くと注理まれば丹五兵衛も。阿也女も共ふと。あつる。涙を拭袖ハ仇物作は  
 といひぬて。まきよは凍めく。さややく又とさうか。其ハ深ハい注

沈て放り殺し多ひねと。又よ卿。母よりとら。あひさるる気色す。  
 當下主管是非ハも。油桶の洞具。ふ塵たて居り。うら  
 甚蒙をりく。十の指をさくく。引も抜むり小杖ひつ。店の櫃  
 不這ひ登り。まが税年よ對ひく。改と低。僕も丹五兵衛か主  
 管よ。是非ハとゆり。め之目今。あつる。か。め。め。縁由ハ。うら  
 ま。ね。ど。さ。結。する。主の難美ハ。その蔭よ。く。小。所。ホ。サ。が。難。美  
 あり。とも。か。く。も。く。ふ。除。よ。と。説。諭。の。婚。姻。を。整。く。進。く。と。へ。  
 さ。り。え。ん。も。ふ。い。く。死。ん。と。さ。ふ。あ。ひ。究。る。小。女。児。の。片。意。地。も。り。  
 三五の生ぐ。後。それ。か。それ。か。ま。果。ゆ。あ。ト。今。且。く。待。と。ま。へ。  
 威勢りく。逼るる。べ。釋迦。小鮮鮎も。食と。と。彼。う。藤。さ  
 従ハ。げ。ん。の。趣。あ。か。む。う。の。り。の。ま。う。さ。む。と。も。猜。し。の。人。あ。あ。ん

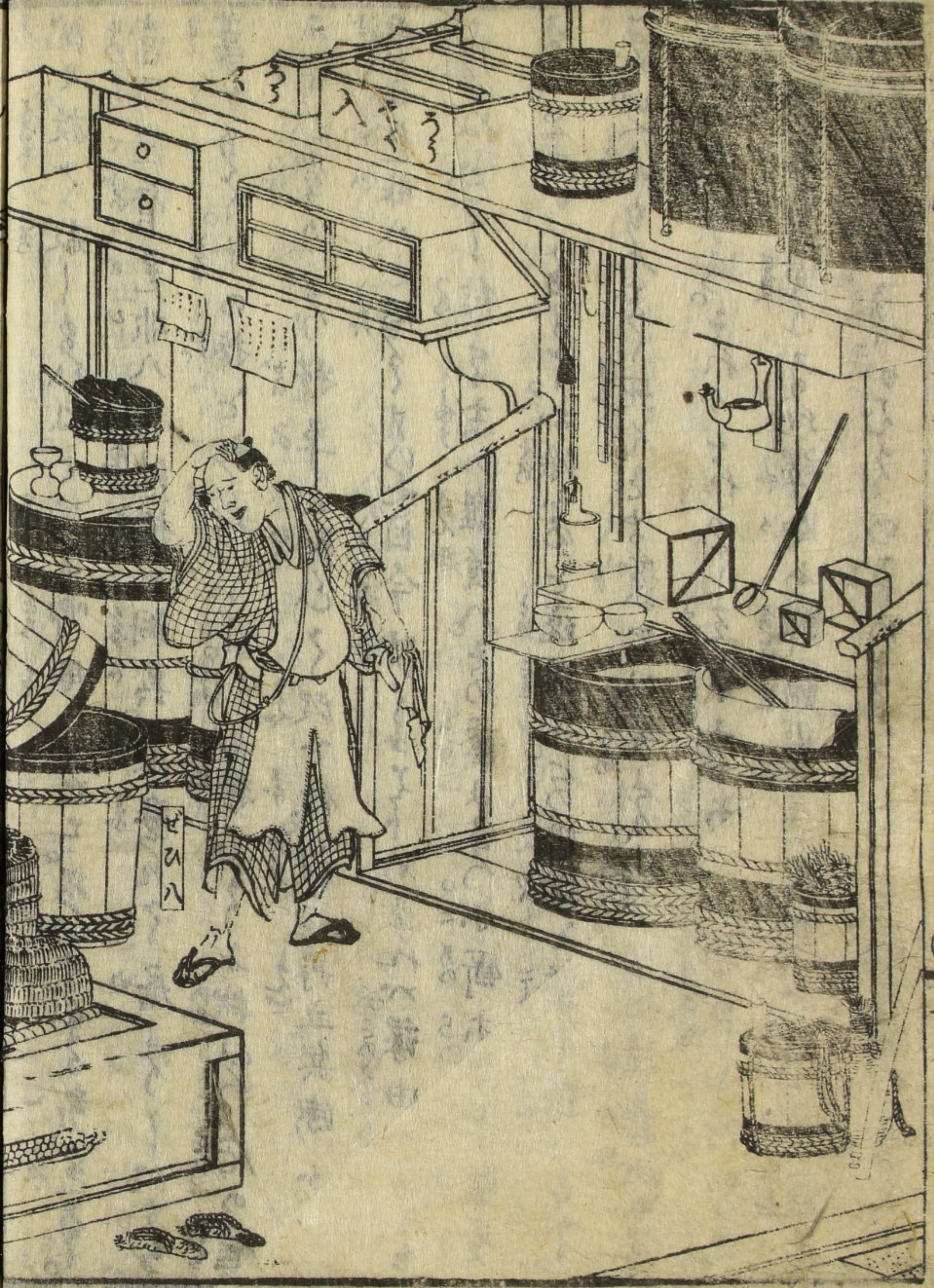
新編源氏物語

三十一

丹五兵衛  
運く税平  
阿茶と  
要らんと  
浅き



丹五兵衛



びんといひ信ちかずし勸解こんげみど。税平ぜいへい夢ゆめくうち点ちま改かへげふ汝なか  
 りふふ。さもあうるん。志こころくうとも。後ののち證據しやうこるくへん。一いち日にち由よし放はなべがじ。  
 汝なのうはおの涙なみだをなみ。目め今いま澄すみをみえる。予よと同おなバは是こゝ非ひハらうら微笑わらえ。  
 その宣のたま入いすでもあらず。おのれけ計けい入いすらあらうと。恋こひつつ。主ぬしの丹に立た兵へい馬ば  
 かかくふ。小こ膝ひざをかし向今いま夢ゆめあらふらんらんら。只ただ一ひと筆ふで。今いま茲こゝ年とし極たぎ乃なり  
 晦くわい日にちをく限かぎ。小こおの涙なみだとあ誓ちか姻いんさまじし。と書かくて遍あまくあられば  
 そのせい文ぶんと。隻ひと袖そでとひらくえく。異ちがひあらず。今いま夜よの岡おか著ちやく滅めつえ  
 るんととる。燈あかり火ひも忽地ちは播活かつと。油あぶら杜つ夏か一いつ世せいの忠ちゆう美びあらうべ死  
 めめも主管こんへと。それらも誓言ちかごるも痛いたく丹五ご兵へい馬ばははくら。とあく  
 とあひ定めらるら。先まへ自又またせんと。只ただ管こんあひ定まめらるら。ひの姫ひめ  
 君きみのお操そうよ身をまさてるら。假かり初はつも阿容あくて婚こん縁えんの澄の書をか

写うつんらうら。不ふ律りつの破やぶとらるら。後のちの難がた美みとこ一ひと當あるら。難がた美みふいとら。  
 若わかしの胸むねと。推おし量りやうつ芝おらるら。阿あ也や女に々々夫むとの袂たもとを引。博はく満まんの入予よ  
 あら一いつ寸すん短たんはバ尋ひろ短たんと世の常じょう言ごんよいふら。悔くわいもそのせんらうら。  
 八はちふり拂はらひぬ今いま宵よの厄やく難がた。頃ころハ四月げつのもどめられば夏秋あき々々  
 全ぜん九く箇くわん月げつ。その間ま少せうの彼か君きみのえん往方ほうを尋索さくめく。そらいくちかるらるら。  
 べんらう。亦またおの涙なみだも笑みたらぬ。死し身みが命いのちを損なす。とらく。妻々々よ志  
 さらぬもららふら。どうやらぬらうがらふ。幸さいと重くも。主ぬし君きみ乃なり  
 息いき女に。とりんととるを丹五ご兵へい馬ばを咬く。これと禁め叔税しゆ平へいり  
 對たいひつ嘆なげ息いき。げはあひ悞ごぬ今澄すみ文ぶんと引えよ。その袖そで返かへりく  
 ろろつバ。これを親おや子こが厄やくかと。大おほ晦くわい日にちを限らうの婚こん姻いん春はるやどまらぬ室  
 の梅うめ咲さるら。由よし又また散ちらる。女に兒こおの涙なみだがらう二ッ二の弓ゆみを彎曲まがり商人々々

八  
 全  
 九  
 箇  
 月  
 其  
 の  
 間  
 少  
 の  
 彼  
 君  
 の  
 え  
 ん  
 往  
 方  
 を  
 尋  
 索  
 め  
 く  
 そ  
 ら  
 い  
 く  
 ち  
 か  
 る  
 る  
 る

八  
 全  
 九  
 箇  
 月  
 其  
 の  
 間  
 少  
 の  
 彼  
 君  
 の  
 え  
 ん  
 往  
 方  
 を  
 尋  
 索  
 め  
 く  
 そ  
 ら  
 い  
 く  
 ち  
 か  
 る  
 る  
 る

世の義理も命も。うづる物うへと。毒しく。やうやう手せうり。現益  
 反く。搦る黒曲らぬ性。を柱て書。夏毛秋毛の筆の迹。を  
 と主従か。一世の浮沈事。稱ど。牙を。捨めん。只憑心。浮陀の心國の  
 西のうら。めも。字々。せり。と。神を誓ひ。偽の證書と。う。出せ。バ  
 我平。是を取。く。讀。ご。ら。巻。く。く。懐。よ。扱。め。う。れ。澄。塔。の。几。巴。年  
 極。ま。む。の。枝。ぐ。し。の。隻。袖。ふ。締。び。一。誓。縁。よ。ま。為。め。の。舅。姑。の。心。事  
 か。我。時。う。ら。か。深。小。教。訓。一。身。と。り。ひ。う。袖。を。う。復。せ。バ。丹。立。立。取  
 て。押。戴。を。婿。と。り。と。余。の。親。よ。を。め。う。ら。限。う。よ。と。ん。言。ふ。る。茶  
 山。の。刀。よ。残。る。と。の。夜。の。鮮。血。の。ひ。あ。り。せ。ん。れ。も。脱。走。せ。ど。是。非。ハ。ハ  
 ら。う。り。と。ん。か。小。断。よ。ま。の。心。忘。ま。て。も。主。の。陰。り。人。み。ひ。ひ。と。と  
 と。め。め。の。笑。の。眉。を。う。く。と。り。由。祝。後。の。言。の。紫。花。婿。う。心。よ。ま。ま

税平。どの。を。送。り。め。く。と。う。う。う。う。深。を。引。え。る。母。の。阿。也。女。も  
 袖。め。と。安。積。の。沼。の。花。う。も。青。や。鼻。月。の。丹。五。兵。衛。が。深。れ。は。ひ  
 へ。る。ぞ。と。ぬ。是。非。ハ。か。信。ご。ら。う。う。う。う。草。履。も。客。ぶ。う。う。言。悪  
 い。ま。ま。う。う。後。了。油。屋。か。深。が。浮。名。を。流。り。え。れ。よ。の。張。本。う。う。

